

思想の翻訳と文字の問題

——比較思想から間文化性の比較思考へ——

森村 修

一 はじめに

本稿の目的は、〈比較思想という問題〉を「インターカルチュラル間文化的な翻訳」という観点から考察し、いかなる哲学思想も、それが用いる文法や「エクリチュール文字表記」の影響を避けられないことを指摘する。

ニーチェは、ウラル・アルタイ言語圏の哲学者は、インド・ゲルマン言語圏の哲学者や回教徒と異なるように世界を眺め、異なった道を歩んでいることもありうると語っていた。またウラル・アルタイ語は、主語概念が発達していないとも指摘した。⁽¹⁾しかし筆者は、ウラル・アルタイ語に属する日本語は主語概念が発達していないのではなく、主語述語関係を重視しないだけだと考えている。その結果、世界の捉え方がインド・ゲルマン言語圏の哲学者と異なる可能性もある。

そこで筆者は、S・ブリクにおける「インターカルチュラル間文化性」という概念

を取り上げ、コンパライティヴ・レンギング比較思考としての翻訳を検討する。その際に、文法という観点に着目し、西田幾多郎と西谷啓治の文体から間文化的翻訳の実践を考察する。最後に、西田の書のもつイメージ形象性に新しい比較思考の可能性を見出したい。

二 間文化的な比較思考の可能性

——ブリクの「翻訳」という実践

ブリクは、西洋哲学を中立的なモデルとする比較哲学のあり方は通用しないという。彼によれば、現代の比較哲学は、中立的な視点に立てないことを意識しながら、自らを異なる諸文化の〈あいだ〉に位置づけざるをえない。そして彼は、異なる文化の差異に立つことを「インターカルチュラル間文化的」とあるという。間文化的であるためには、「他者」に開かれていることが重要であり、「自分自身にとって居心地のいい領域から外部へと進んで踏み出す

意欲⁽⁴⁾が必要なのだ。

ブリクが、異なる思想が異なる言語で表現されていて、それらの〈あいだ〉に立つことが可能だと考えるのは、彼が異なる思想を英語に「翻訳する」ことで、比較思考を実践できると信じているからだ。彼にとつては、英語への「翻訳」という作業が、比較思考を実践することを意味しているのである。

彼によれば、唯一可能なのは「複数の異なる思考方法を実際⁽⁵⁾に交差させることによって、比較哲学を学ぶことだけである」。それゆえ思考方法を交差させるには、言語を見る見方が新しくならなければならない。彼は、言語の見方を刷新した哲学者としてハイデガーとデリダに言及し、また老荘思想と比較することで「間文化的遭遇」を演出する。こうして彼は、比較思考に基づく西洋哲学の脱構築を実践するのである。

しかし筆者から見れば、ブリクも文化の〈あいだ〉に立っているとはいい難い。なぜなら、ブリクの翻訳論には欠陥があるからだ。彼は、老荘思想が古典中国語で表記されていることを重視しない。要するに、彼は表意文字と表音文字の差異に無頓着なのだ。思想と言語が密接に絡み合っているならば、言語表記がそれぞれの思想に影響を与えないはずがない。それゆえ、ブリクには、「文字表記」に対する感性が欠落しているといわざるをえない。

思想を間文化的に翻訳する際に最も重要な問題は、「文字表記」をどのように捉えるかということだ。それゆえ、

「漢字仮名交じり文」を用いる日本人の思考は、西洋哲学とも中国思想とも異なる。井筒俊彦は、「中国人の漢字意識ばかりでなく、漢字を摂取して、平仮名、片仮名を加え、世界一複雑な文字システムといわれるものを作り出した日本人の『書く』意識のなから、デリダを超えて、新しいエクリチュール論が生まれなければならない、と、私は思うのである」と述べていた。井筒の指摘は、日本語で思考する哲学者に対して、思想の「間文化的翻訳」という実践の場面において、どこまで「文字表記」や文法構造に配慮できるかという問いでもある。そこで次に、西田幾多郎の文体と彼の哲学との関係について検討すること、これらの問いについて考えてみたい。

三 日本語文法から見た西田哲学

——「哲学」に「主語」はどこまで必要か

筆者は、西田哲学を日本語との関係でのみ理解しようとしているわけではない。しかし西田哲学の特異性は、その「文字表記」にあると考えている。西田の文章について、かつて小林秀雄は「日本語では書かれて居らず、勿論外国語でも書かれてはゐないという奇怪なシステム」と評した。逆にいえば、西田には「奇怪な「文字」システム」でしか思考ができなかったということもある。

下村寅太郎は、「西田哲学と日本語」の中で、西田哲学と「主語」の問題について考察している。下村は、日本語の構造が西

洋語といかに異なるかを指摘する。彼が注目するのは、主語述語関係の有無が西洋人と日本人の思考に異なる影響を与えているということだ。日本語には主語がないと思われる場合でも、主語が単に省略されているのではなく、主語と述語を根本形式としないだけだ。下村によれば、主語の存在を必要としないのは日本語の特色だからである。

しかも下村は「日本語文法では昔から「は」と「が」の区別が問題にされている。本居宣長も問題にしている。これは西洋の文法では理解されない。それ故、西洋文法の立場からしばしば二重主語といわれている」という。確かに「は」と「が」が「主語を現わす助詞であるかどうかは問題である」にしても、日本語では主語の「存在」にこだわる必要はない。下村もいうように、「は」と「が」を必ずしも西洋の文法という主語の助詞と考える必然性はない」。

重要なのは下村が、西田の「場所」の思想における「絶対無の自己限定」や「場所の自己限定」という考え方が「主語のない日本語と相対応するものがある」と指摘したことだ。「場所」の思想は、「日本語で思惟している我々の思惟の仕方そのものの論理の自覚」に根ざしているのだ。

助詞は、漢文訓読のヲコト点に由来する「てにをを」⁽⁹⁾として、日本文法論が形成されるにつれて、富士谷成章、鈴木胤などが様々に解釈してきた。宣長にとっては、「てにをを」は単なる助詞の問題ではない。『詞の玉緒』(一七八五)では、「てにをを」

は「詞」という「玉」を貫く「緒」であり、「言葉の断続に關わる法則そのもの」を意味する。その意味で、「緒」がなければ、「詞」は何ものも表わすことができない⁽¹⁴⁾。だから、「てにをを」分析は、背後の思想の問題に関わらざるをえない。この意味で西田哲学のテクストは、「てにをを」を含む「漢字仮名交じり文」の観点から分析する必要がある。そして筆者は、西田の「場所」の思想は西田の用いる「奇怪な」日本語に制約されていると考えるのである。

日本語が主語述語関係を重視しないことから、主語(主観=主体)概念は西田哲学を解釈する際には必ずしも必要ではない。そして西田の「奇怪な」日本語の性質が「場所の論理」と結びついているとすれば、西田哲学と日本語との関係も新しく問い直されるべきである⁽¹⁵⁾。

四 西洋文法学から見た京都学派の哲学

——思想の翻訳(不)可能性について

次に、西田や西谷啓治の文体について、「間文化的翻訳」という観点から考えてみよう。R・エルバーフェルトは「空の中間態——西田と西谷」で、彼らの文章には古代ギリシア語の「中間態」に近い表現があるという。例えば西谷は、「我々は『海が見える』とか『鐘が聞こえる』とか言う。その場合『が見える』は海『を見る』ということも海『が見られる』とも違う。むしろ、その両方を未分のまま一つに言い現わしている」と述

べている。エルバーフェルトによれば、西谷の「見える」や「聞こえる」は中動態を表現している。また現代の日本語の「思える」も中動態に近い表現である。しかし、これらの日本語表現は、西洋語に翻訳することが難しく、再帰的用法と非人称主語を用いて表現するしかない。

西田のテクストにも、「考えられる」、「考えられるのである」、「考えられなければならない」、「考えられるものでなければならぬ」など、中動態表現が多用されている。これらは通常、「可能的(考えることができる)」「受動的(考えられる)」のどちらか一方で理解されている。エルバーフェルトによれば、西田の場合、可能的か受動的かどちらか一方に決定できないし、つねに両者であるとも決定できないことがある。彼は、西田の思考について、「西田は『何か』を思考するのではない。そうではなくてむしろ、思考が、思考そのものを彼の中で可能にする。(中略)これはまさに、思考に関する中動態の意味であろう。『思考が思考の場所において思考自身を思考する(Das Denken denkt sich selbst im Ort des Denkens)』⁽¹⁸⁾と語っている。

エルバーフェルトは、西田の思考構造は、「思考が思考自らを思考において思考する」という思考の自己展開が間断なく続くと考えた。それゆえ思考の運動が存在しないならば、思考は思考の思考ではない。「中動態」に着目したエルバーフェルトの間文化的な比較思考は、西田哲学を西洋語への翻訳を通じ

て、その哲学が日本語文法に制約されていることを明らかにする。

エルバーフェルトの分析は、上原麻有子の指摘と対比すると両者の差異が顕在化する⁽¹⁹⁾。上原は、西田の哲学言語を、言文一致運動との関係で生じた「新日本語」と「哲学的文法」から分析し、ドイツ語やフランス語のテクストを理解しながら翻訳するプロセスの中から創案されたと解している。上原は、西田の「意識が意識を意識する」という自覚の構造は、西洋語の再帰代名動詞の機能を模倣したものとして生まれたという⁽²⁰⁾。

しかし、上原の指摘は十分ではない。西田の「哲学的文法」が西洋語の再帰的用法からの応用であるというだけでは、彼の文体の奇怪さは捉えられない。エルバーフェルトは、「西田のテクストが明らかにするのは、西洋においては、比べられるものがほとんどない一つの形式である⁽²¹⁾」とすら語っているのだ。

それでも西田の哲学テクストは、あらゆる人に読まれうるし、解釈されうる。西田哲学は、日本語の〈外部〉に開かれており、「間文化的遭遇」に曝されているからだ。たとえ西田の文体がどれほど奇怪であっても、それが文字で書かれている限り、つねに他者に読まれうる。

五 おわりに——「書」の比較思考に向けて

ニーチェとほぼ同じ時代を生きた西田は、philosophierenではなく、奇怪な漢字仮名交じり文を駆使して「哲学」していた。

それゆえ西田が見た世界は、ニーチェとは異なっていたはずだ。なぜなら、言語表記と思考が異なれば、世界の分節化が異なるからだ。しかし間文化間翻訳のための万能な「ロゼッタ・ストーン」は存在しないとしても、西田の言語は西洋語に翻訳可能である。というのも、思想が開かれていく限り、間文化的な〈あいだの文化〉として生じ、〈文化のあいだ〉で誤解を含めて解釈されるしかないからだ。そもそも、正当な理解など「間文化的翻訳」も含めてありうるのだろうか、甚だ疑問である。

最後にもう一度西田哲学が、「奇怪なシステム」を媒介していることに注意しよう。西田の「文字表記」は異質のまま佇立しているが、彼の「書」は一つの形象として美的価値をもつ。「文字表記」を「書」という形象として問題化することで、私たちは間文化的な比較思考の別の次元を見ることができるといえる。

井筒は中国や日本で、「エクリチュール」は、いわゆる書として発展した。(中略) 極東の書伝統では、人は心を凝らし、己の全存在のエネルギーを指と一管の筆に集中して文字を書く。筆の動きの緩急遅速、圧力の強弱、墨の濃淡、乾潤の変化が、すべて最高度の有意味性においてこれに加わって、書は書道となり、芸術となった」と書いた。

思想の意味は間文化的翻訳によって伝達される。しかし、「文字表記」は、形象として美的「価値」を伝達する。そこに、新しい比較思考の可能性が見出されるはずだ。

(1) Vgl. F. Nietzsche, *Nietzsche Werke: Kritische Gesamtausgabe*, Abt. 6, Bd. 2, *Jenseits von Gut und Böse, Zur Genealogie der Moral* (1886-1887), Herausgegeben von G. Colli und M. Montinari, Walter de Gruyter & Co., 1996, S. 29.

(2) 橋村「比較という方法」(岩波講座『哲学史の哲学』所収、岩波書店、二〇〇九年、七九—一〇〇頁)参照。

(3) S. Burik, *The End of Comparative Philosophy and the Task of Comparative Thinking: Heidegger, Derrida, and Daoism*, State University of New York Press, 2010, p.2.

(4) *ibid.*, p.2.

(5) *ibid.*, p.4.

(6) ブリクは京都学派の思想を誤解してゐると思われる (cf. Burik, *ibid.*, p.141f.).

(7) 井筒俊彦「書く」——デリダのエクリチュール論に因んで——『思想 構造主義を超えて』所収、七一八号、岩波書店、一九八四年四月、一八頁。

(8) 小林秀雄「学者と官僚」『小林秀雄全集』第七巻、新潮社、一九七八年、八四頁。

(9) 下村寅太郎「西田哲学と日本語」『下村寅太郎著作集12 西田哲学と日本の思想』所収、みすず書房、一九九〇年、一八二—一八三頁参照。

(10) 同書、一八二—一八三頁。

(11) 浅利誠「日本語と日本思想」本居宣長・西田幾多郎・三上章・柄谷行人(藤原書店、二〇〇八年)八七頁以下を参照せよ。

(12) 下村、前掲書。下村が、佐久間や三上章(一九〇三—一九七二)による「主語廃止論」ともとれる発言をしていることに注意すべきである。

(13) 下村、前掲書、一八三頁。

(14) 前田英樹「時枝誠記の言語学」『国語学原論(下)』所収、岩波文庫、二〇〇七年、二九六頁。

- (15) この点については、中村雄二郎『西田幾多郎』（岩波書店、一九八三／二〇〇一年）や『西田哲学の脱構築』（岩波書店、一九八七年）も参照せよ。
- (16) Cf. R. Elberfeld, "The Middle Voice of Emptiness: Nishida and Nishitani," in Bret W. Davis, Brian Schroeder, and Jason M. Wirth, eds., *Japanese and Continental Philosophy: Conversations with the Kyoto School*, Indiana University Press, 2011, pp.269-285.
- (17) 西谷啓治『覚』に「西谷啓治著作集」第13巻所収、創文社一九八七年、一〇六頁。
- (18) R. Elberfeld, *ibid.*, p.278.
- (19) 上原麻有子「翻訳と近代日本哲学の接点」京都大学大学院文学研究科日本哲学史研究室紀要『日本哲学史研究』第6号所収、二〇〇九年、二九―五三頁参照。
- (20) 同書、四八―四九頁参照。
- (21) R. Elberfeld, *ibid.*, p.278.
- (22) 井筒俊彦『書く』——デリダのエクリチュール論に因んで——一八頁（強調・井筒）。
- (23) ポストモダン美学と京都学派というテーマで「東西思想の対話」の実例がある（ハル・フォスター編『視覚論』樽沼範久訳、平凡社ライブラリー、二〇〇七年参照）。
- （もりむら・おさむ、現象学・ケア倫理学・日本哲学、
法政大学大学院教授）